

互いの御影説話における空海観の考察

——杲宝撰『弘法大師法私』を中心に——

小 西 貴 文

はじめに

弘法大師信仰において空海は、様々な尊格と関連を有する存在として描かれてきた^①。その中の一尊である八幡神は、後述するように真言宗が初期の頃より関係が深く、中世日本において八幡神と空海が互いの姿を描き合うという「互いの御影」説話が登場し、両者が同体であることが語られた。

互いの御影説話を密教の事相の中に組み込んだ人物として東寺の杲宝（一三〇六―一三六二）が挙げられる^②。杲宝によって作成された『弘法大師法私』^③は、空海を本尊とした修法である、所謂『弘法大師法』の一種であり、道場観に互いの御影の描写が記される。

本次第に言及したものとして挙げられるのが、高見寛恭氏の「弘法大師法考（二）」^④である。ただ、高見氏の論考は複数の『弘法大師法』の概要を述べるものであり、本次第もその一部として数頁に亘って言及する程度に留まっている。平成元年（一九八九）になると加藤有雄氏によって、伝燈大阿闍梨松永昇道氏の伝授をまとめた『勸流杲宝方伝授目錄解説』^⑤が編纂された。本次第は『自行次第西』という名前で登場し、詳細に伝授の内容が記されており、本稿作成にあたり筆者も多く示唆を得た。しかし、テキストの成立については、杲宝が感得

したものとして、歴史的問題が「神話」に則って語られている。^⑥

次に八幡神が舍利・宝珠を媒介として愛染・天照、そして空海などの複数の尊格と団体関係にあることを説いた『八幡講秘式』に注目したのが船田淳一氏であった。^⑦ 船田氏の研究では中世東密世界における八幡神観や宝珠観が明らかにされる一方、八幡本地愛染説に主眼を置くことから、空海に関してはあくまで八幡神と団体化された一尊という位置に留まっている。

以上の様に従来の先行研究では、八幡神と空海を団体とする言説について言及するものの、団体視された空海がどのように理解されたのかについての検討は十分に行われてこなかった。そこで本稿では、杲宝の『弘法大師法私』の内容を検討し、空海と八幡神とを団体化した空海・八幡団体説の展開によって作り出される空海観の一端を明らかにしたい。^⑧

一 空海伝にみられる八幡神の概略

(一) 出現する八幡神

空海伝において八幡神との関係が登場する初期の資料が『御遺告二五箇条』（以下、『御遺告』）である。『御遺告』の第二〇条には、

夫以神護寺是和氣氏建立、八幡大菩薩主託庭也。而依真繩大夫達所_レ言、余頃年修住。爰真繩大夫達於建立密教之言、朝夕宛如_レ示護法之相。因_レ茲師檀之期篤在_二肝岫_一。加以_二寺院_一付_二属永代_一、敢無_二内外之情_一。然而後代必有_二争嗽_一（傍線部は筆者によるもの。以下同じ）。

とある。直接、空海と八幡神が何らかの行動を行ったというわけではないが、神護寺は和気氏によって建立され、八幡神の託庭であったことが記されている。『御遺告』は空海に仮託された後世の作であるが、実際、神護寺は帰朝した空海が滞在し、弘仁三年（八一二）には金胎の灌頂を行った場所である。『御遺告』の内容は約四〇〇年の間、概ね変わることなく後世の空海伝に踏襲されてゆく。

互いの御影説話が絵巻に登場したものととして挙げられる最古のものが、白鶴美術館蔵の元応元年（一二一九）に描かれた『高野大師行状図画』（以下、『行状図画』）の「八幡約諾」である。

或伝に曰。東大寺の中門にして八幡大菩薩と大師と御約諾の事あり。大菩薩のたまひけるは我と大師とは影と形とのことし。わかすまむ所に大師かならずはなれ給へからず。大師のおはせむ所にわれかならず随逐すへし。たかひに加持をたれおなしく化導をたすけむと。凡八幡大菩薩は真言上乘の高祖毘盧覺王の応迹也。機にしたかひ、時をはかりて或は釈迦としめし、或は弥陀と現す。天竺にして善無畏三蔵に對し密教を授しは、われなりとまさしく神託あり。夫理智法身の依正しはらく表裏の名をわかち、大日金薩の因果たかひに師資の徳をあらはす。能所かはるゝいて、或はさつけ或はうく。大菩薩と大師と内証あひちかきことしりぬへし。〈中略〉神といひ人といふ。外用ことなるに、たれとも師となり資となる。た、一聖の分身也。御約諾のおもふきまことにふかきゆへあり。無辺の神驗こゝろ言をよひかたし。又大菩薩と大師とをのゝ筆をとりてたかひに御影をかきたまへることあり。件の御影いまに現在せり。^⑩

『行状図画』では両者には優劣がなく影のように一体で、両者は内証が近く、随逐して衆生を化導する。また、両者は姿形が異なれども分身であるのだという。この前提に立つと八幡神が空海を描いたとしても、絵像の空海

は同時に八幡神でもあり、空海が描く八幡神も空海自身となる。つまり、「相互に姿を描きあう」とは両者が個別の存在ではなく、同一であることを絵図によって可視化・表象しようとする営みであった。

榮海（一二七八―一三四七）の『弘法大師伝』（一三二五）には、

八幡大菩薩、大師ノ仏法ヲ守リ給ハン為ニ東寺ニ来リ給フ。大師則チ御体ヲ写シ留奉リテ神殿ニ納メ玉フ。又大師大菩薩互相御影ヲ書給フ。彼ノ両影神護寺ニ安置スル処是也。^⑪

とある。空海は密教守護のため東寺に來臨した八幡神の姿を書き写し神殿に納めたと記しており、次にみる東寺八幡神の縁起を語った『東宝記』（一三五二）の「寺家旧記」を意識したものであると考えられる。また、來臨した八幡神も空海の姿を書き写し、両者の御影は神護寺に安置されているとして御影の所在が記されている。つまり、互いの御影をめぐる伝承が現実の実在する場所にその所在が書き留められることで、単なる伝承から歴史的事実へと変貌するのであった。

（二）互いの御影説話の成立背景

次に互いの御影説話の成立について『東宝記』『鎮守八幡宮』の条に引用される「寺家旧記」に着目したい。

寺家旧記云（中略）当寺之影向不_レ違_二神託_一、僧形之御躰現_二于空中_一。其遷座元由者、桓武天皇御宇延暦遷都之初、東寺草創之刻、為_二帝都鎮護_一有_二勸請之儀_一。王城之降臨以_レ之為_レ初。此時未_レ奉_レ安置御躰、只勸請之儀許也。至嵯峨聖代、平城天皇御事之時、与_二大師_一有_二御密談_一。先御立願御願成就之後、去弘仁年中、大師

奉_レ勅重勸_二請之_一。三所御鉢、法鉢、俗鉢、并女鉢武内宿祢親影現_二虚空_一。初写_二紙形_一、後刻_二木像_一、被_レ奉_二安置_一社壇_一。真身顯現、権者之彫刻、本朝諸神何社有_二此例_一乎。誠知、当社者、無_レ及之宗神、第一之靈社也云々。¹²⁾

「互いに」ではなく一方的な写生に留まるが、空海が東寺において八幡神の姿を書き写したという「空海」・「八幡」・「書き写す」という共通点をみることができる。よって、『東宝記』が引用した「寺家旧記」の記述は互いの御影説話成立の出発点として位置付けられよう。一見すると『東宝記』の成立以前に白鶴美術館蔵の『行状図画』が成立しているように思われる。だが、東寺の八幡三神像が貞観年間（八五九～八七七）の成立である点や、菓子の変（八一〇）を契機として空海が八幡神を勧請、または図像を構想していた点から早い時期において八幡神をめぐる靈験譚成立の素地が東寺にはあった。¹³⁾ 加えて、互いに姿を描き合うというよりも、空海による一方的な写生の方が伝承としては簡略である。よって「寺家旧記」に所収された伝承は『行状図画』作成以前に既に成立していたと考えられる。

栄海の『弘法大師伝』では、八幡神も空海の姿を描き、両者の御影が神護寺に安置されたとして、舞台が過去、すなわち空海在世時の東寺から栄海のいる現在の神護寺に移ることとなる。

神護寺における八幡神の祭祀の様子を記した現存する最も古い資料である『承平実録帳』（九三二）には「八幡大菩薩像一鋪 御座床二前 前机二前 白木礼盤二基」¹⁴⁾とあり、神護寺根本堂に八幡神が祀られていたのが分かる。管見の限り神護寺に祀られる八幡神画像が空海筆として紹介された最も古いものが建久八年（一一九七）の『文覚上人書状案』である。¹⁵⁾ 文覚（一一三九～一二〇三）は神護寺の荒廃によって鳥羽院の時代に鳥羽の宝蔵に御影が納められた旨を記しており、文中に「大師御在世之時、所_レ奉_二安置_一当寺_二八幡大菩薩御影大師御筆_一」として空海の筆であることが言及されている。だが、強烈に朝廷を批判し、八幡神の御影を神護寺に返却すべきと

主張した文覚の書状には互いの御影について言及されていないことから、互いの御影説話と対となる空海御影は文覚以降の成立と見るべきである。

さらに、文覚の弟子である上覚（一一四七―一二二六）の『行慈書状』（一二二六）の内容についても注目したい。『行慈書状』には、神護寺復興を神護寺の住僧たちが忘れてしまっている現状を憂いた上覚が、「如_レ此忌類、於成_レ興盛者、不_レ可_レ有_二神天冥助_一。又大師八幡何事御加護哉、磨滅即時倒者歟^⑰」として諸天善神の冥助に加え、空海と八幡神の加護を得られないと嘆いている。すなわち上覚は八幡神と空海を同列に据えており、互いの御影が両者を同一であることを表象する存在という点にも通じてくる。

佐藤弘夫氏が中世の祖師像の一面として、寺や僧を守護・監視する存在であると指摘しているように、中世において祖師は「動的な存在」であり上覚の空海観とも相違ない^⑱。加護を行う「動的な存在」である空海と従来、神護寺の鎮守であった八幡神が次第に同一視されるようになった。加えて神護寺における八幡神の御影の存在や『東宝記』が引用する「寺家旧記」の内容も結び付けられることで、互いの御影説話が成立する。成立した説話は必然的にもう一方の八幡筆とされる空海御影を生み出すこととなる。すなわち、東寺に端を発し、神護寺において互いの御影説話が形成され、説話の成立に伴う対になる御影が作成されたことによって、説話の完成を見ることができよう。

二 『弘法大師法私』の概要

（一）『弘法大師法私』の構成

『弘法大師法私』の奥書には「観応元年十月二日 権小僧都 杲宝」、そして「寛文六年二月二三日 権小僧

都 杲決」の書写識語がみられる。本次第が所収される『仏海』は、兵庫県田可群加美町にある金剛山金蔵寺が昭和四〇年（一九六五）に先代の東野寛明住職の三回忌にあたり出版したものである。次第の翻刻は高見観應氏の因る所であるが、便行用に「表白神分析願勸請発願小祈願礼仏廻向等私案加_レ之」とあり実践用に一部が編み直されていることに留意しなければならない。ただし、当該部分は修法の目的や行者の意樂に応じて変じる部分でもあることから、次第の根幹に影響を及ぼすものではない。¹⁹⁾

『弘法大師法私』の構成は以下のとおりである。

壇前普礼	着座普礼	塗香	三密観	浄三業	三部	被甲護身	加持香水	加持供物	じ字観	浄地	浄身
観仏	金剛起	普礼	表白	神分	五悔	勸請	発願	五大願	普供養	三力	四無量観
地結	四方結	金剛眼	召罪	摧罪	業障除	成菩提心	道場観	大虚空蔵	小金剛輪	送車輅	請車輅
召請	四明	拍掌	結界	虚空網	火院	大三昧耶	闍伽	華座	振鈴	釈迦鉢印	羯磨会三七尊印
印	五供養印明	塗香	花鬘	焚香	飲食	灯明	事供	讚	普供養	三万	小祈願
印明	理趣総印	五秘密印明	金剛吉祥	破諸宿曜	成就一切	本尊加持	宝珠三種印明	五種相応印明			
仏眼加持	入我々入	本尊加持	正念誦	本尊加持	字輪観	本尊加持	散念誦	仏眼印明	後供	闍伽	
後鈴	讚	普供養	小祈願	礼仏	廻向	至心廻向	解界	発遣	三部被甲護身等	礼仏出堂	

構成を概観して分かるように『弘法大師法私』は、『金剛界念誦次第』を構成の基盤としており、『如法愛染法』にも通じる。『秘鈔問答』に「而題_二如法_一者如宝義為_レ不_二顯露_一、秘_二如宝_一書_二如法_一也₂₀₎」と口決されるように、如法とは通常の「法の如し」という意味ではなく、如意宝珠を意味しており、『如法愛染法』とは如意宝珠の三摩

地に住する愛染明王を本尊とする修法である。管見の限り最も『弘法大師法私』と構成が共通したものととして、東大寺図書館に所蔵される文和三年（一三五四）の『八幡本地供次第』²¹が挙げられる。この次第は、本地を愛染とする八幡神を本尊として編まれた次第である。東大寺図書館に所蔵される次第以外でも、室町時代に書写された大須真福寺蔵の『八幡本地行法』²²や同寺所蔵の『八幡本地行法私記』²³では、用いられる印明の順序や有無の違いはあるものの『弘法大師法私』と共通する部分も多い。

八幡神の本地は主として阿弥陀如来や釈迦如来とされるが、一二〇〇年代半ば以降より愛染明王を八幡神の本地とする説が登場し始める。愛染明王を本地とする現存最古の資料が文永一〇年（一二七三）の識語を有する大須真福寺蔵の『八幡大菩薩』であり、

或明師口伝云、着^ニ納衣^一、右手^ニ持^ニ錫杖^一、左^手持^ニ念珠^一、首^ニ日輪^一ヲ頂タル老僧ノ御躰也。御袈裟ニヲキテハ赤色ノ異説^{コレ歟}已^レアリ。先、日輪ヲ頂戴シタルハ、愛染王ノ本地ヲ表シ、錫杖ヲ持タルハ、タムタトウヲ表ス。已^レ出世ノ人頭幢、地藏ノ本誓ヲアラハス也。六輪ハ即、六道ノ表示。又、愛染王ノ六臂也。納衣亦、大悲薰修也。表ス是如意宝珠ヲアラハス。²⁴

として或明師の口伝によれば、八幡神は右手に錫杖・左手に念珠を持つ老僧の姿であった。また、八幡神の首の日輪と錫杖に付く六輪は、愛染明王の熾盛輪と六臂を表わすものという共通性が見出され、両者は本地と垂迹の關係にあるとされる。

同時期の資料として、弘安九年（一二八六）に佐々目流の頼助（一二四四～一二九六）によって記された『八幡講秘式』²⁵がある。

『八幡講秘式』では、如意宝珠と愛染明王の同体関係が強く意識されており、入定する空海は愛染金剛の微細定に住しており、舍利すなわち如意宝珠を媒介として空海や八幡神、天照大神などの諸尊は全て同体とされた。後述するが『弘法大師法私』においても、舍利＝宝珠・大日如来・愛染・八幡・空海として諸尊が同体とされることから、『八幡講秘式』をはじめとする八幡神の本地を愛染とする諸テクストは、『弘法大師法私』成立の前提として確認しておく必要がある。

(二)『弘法大師法私』の成立

『弘法大師法私』の成立について、注目すべき点として挙げられるのが三寶院流と勸修寺流との関係である。まず、本次第の道場には

戒定恵解之所^二薰修^一慈悲行願之所^二依止^一也。如^二芥子^一猶是遮那周遍之妙躰、似^二玉石^一。即是万徳円満之法身、竜肝鳳腦、名^二之如意珠^一。誠是虚誕、自然道理釈迦分身真実如意珠也。密之上密深之中深、只在^レ此^{②⑥}

とあり、醍醐寺三寶院流の勝賢（一二三八～一二九六）の『秘鈔』の巻第一四「駄都」での道場観の一部が引用されている。また興味深いのは、東大寺図書館所蔵『八幡大菩薩法』^{②⑦}の存在である。本次第の道場観は『弘法大師法私』や前節で挙げた次第と異なっている点から、別系統の次第である。しかし、次第に記される印明から本地愛染説に基づき、かつ宝珠信仰を取り入れた次第でもあることからおよその前提は共通している。『八幡大菩薩法』の奥書には、「此次第ハ巻尾上人我宝為^二佐々目大僧正有助^一被^レ作^レ之云々」とあり、杲宝の師の一人である我宝（？～一二三七）の名がある。我宝は浄宝（一二八四～一二四三）に三寶院流の法流の一つである金三流

楨尾方を授け、杲宝もその流れを汲むと考えられている。²⁹⁾ 奥書に登場する佐々目流の有助は頼助の弟子であり、ここに三宝山流と佐々目流において本地愛染説に基づく八幡信仰の接触が確認できる。

次に注目したいのは勧修寺流との関連である。杲宝は貞和二年（一三四六）に師である栄海から勧修寺流を授法している。一章で確認したように栄海の『弘法大師伝』には、互いの御影伝承と神護寺が御影を所有していることが言及されており、御影説話については既に史実として両者に共有された認識であった。また、現応二年（一二三〇）頃に栄海は関東に下向して鶴岡八幡宮寺二五坊供僧を勤めおり、鎌倉期には勧修寺の中心にいた僧たちは悉く関東に下向して佐々目流の拠点たる鎌倉の地で真言寺院に奉仕していることが確認されている。³⁰⁾

杲宝は栄海の弟子であることから『弘法大師法私』の作成にあたって、栄海や勧修寺の僧たちの影響を念頭に入れておく必要がある。松永氏は伝授のなかで「本次第は、杲宝師の感得によって編まれたる」と述べているが〈表〉のように、これまでにみた互いの御影説話や本地を愛染とする八幡信仰の流布、類似した修法次第の形成時期という一連の流れの中で、観応元年（一二三五）の奥書を有する『弘法大師法私』が成立したと考えられる。

〈表〉

作者	名称	成立年代
不明	『八幡大菩薩』	文永一〇年（一二七三）
頼助	『八幡講秘式』	弘安八年（一二八六）
我宝	『八幡大菩薩法』	正和六年（一二一七）以前成立
栄海	『弘法大師伝』	正中二年（一二三五）
杲宝	『弘法大師法私』	観応元年（一二三五）

宗心	『八幡本地供次第』	文和三年（一二三四）以前成立
不明	『八幡本地行法』	室町時代（一三三六～一五七三）
不明	『八幡本地行法私記』	室町時代（一三三六～一五七三）

最後に『弘法大師法私』成立の時期に、鎌倉幕府の滅亡に伴い旧幕府の祈禱僧たちが室町幕府の祈禱僧へと転身している点についても見落としてはなるまい。平雅行氏によって禅秀なる祈禱僧が幕府滅亡後、佐々目流の聖教を持ち上洛していることが指摘されており、東国独自の次第・口伝が京へ流入があったことは十分に考えられる。つまり、三宝院流・勤修寺流を中心にして西国・関東間における思想・人的ネットワークの交流が『弘法大師法私』の成立の基盤となった。前節において指摘したように、類似した次第が複数確認できることから、『弘法大師法私』は奇異な次第というよりも本地愛染説に基づく八幡神を本尊とした次第の派生形の一つに位置づけられる。ただし、互いの御影説話を通して空海も本尊に加えられたという点に本次第の独自性を見出すことができる。

（三）道場観について

本次第における道場観をみてゆきたい。道場観では密教の事相の観点から互いの御影説話を理論づけしており、互いの御影説話における八幡神と空海がどのように理解されていたのかが明らかになる。

観想坦上有^二梵^一字。变成^三五峯八柱宝楼閣^一。其宮殿中有^二曼荼羅壇^一。上有^二梵^一字。变成^三淨満月輪^一。、中有^二梵^一字。变成^三八葉白蓮花^一。花台有^二梵^一字。变成^三法界塔婆^一。所謂、蓮花台達摩駄都是也。此法性制底転成^三摩訶

毘盧遮那如來。身色如_二白月_一。一身四面也。住_二塔婆印_一。被_二妙綃毳天衣_一。四智四定十六大菩薩八供養四摂乃至五億俱胝微細法身、前後圍繞、各々以_二本誓加持_一、自住_二金剛月輪_一、持_二本三摩地標幟_一。演_二說身語心金剛_一。此自性三十七尊等一切衆生為_レ斷_二無始間隔_一。故隱_二本性無垢智月_一。住_二衆生本染理日_一、入_二馬陰藏三摩地_一、變_二三身_一成_二系字金剛牀性_一。字變成_二五鉈杵_一。、、、變成_二大染明王_一。^②

道場觀の冒頭では、宮殿内の_二㊦字_一が變じて制底すなわち大日如來の三昧耶形である法界塔婆となると記されている。この過程は通常の『如法愛染法』の次第の道場觀でも蓮台の種子の_二㊦字_一が變じて_二㊦字_一を内に納める七宝の塔婆へと變化し、_二㊦字_一は變じて舍利すなわち如意宝珠となることが説かれることから『弘法大師法私』は宝珠合行の次第における構造を踏襲している。^③

続いて、三七尊すなわち一身四面の大日如來は衆生の無明を斷絶するために馬陰藏三摩地に入り_二系字_一の五鉈杵を通じて愛染明王となる。

身色如_二日暉_一。住_二於熾盛輪_一。三目威怒視。首髻師子冠。利毛忿怒形。又安_二五鉈鉤_一。在_二於師子頂_一。五色華髻垂_二天帶_一。覆_二於耳_一。左手持_二金剛鈴_一。右執_二五峰杵_一。儀形如_二薩埵_一。安_二立衆生界_一。次、左金剛弓。右執_二金剛箭_一。如_レ射_二衆星光_一。能成_二大染法_一。左下手持_レ彼、右蓮如_二打勢_一。一切惡心衆、速滅無_レ有_レ疑。以_二諸華鬘索_一。絞結以_レ嚴身。作_二結跏趺坐_一。住_二於赤色蓮_一。蓮下有_二宝瓶_一。両畔吐_二諸宝_一。無量眷屬前後左右圍繞。本尊不_レ捨_二大悲_一。故和_レ光同_レ塵入_二四摂三摩地_一。心上現_二系字_一。、字變成_二如意珠_一。、即駄都也。戒定患解之所_二薰修_一。慈悲行願之所_二依止_一也。如_二芥子_一。猶是遮那周遍之妙牀、似_二玉石_一。即是万徳円満之法身、竜肝鳳腦、名_二之如意珠_一。誠是虚誕、自然道理釈迦分身真実如意珠也。密之上密深之中深、只在_レ此。^④

前半部では、『瑜祇経』「愛染王品第五」における金剛手の偈頌が引用され、五鉤杵が愛染明王の姿へと変現する。本次第に限らず概ね八幡神の本地を愛染とする次第や、愛染を単体で本尊とする次第でも尊形の詳細は『瑜祇経』の一節に依る。

愛染明王は大悲をもつて四摂の三摩地に入ると、明王の心上には如意宝珠の種子である^㉔が生じ如意宝珠へと変成する。傍線部は醍醐寺三宝院流の勝賢の『秘鈔』巻第一四「駄都」での道場観の一部が引用されていることは既に述べた。傍線部後半の宝珠の説明は『御遺告』の第二四条「東寺座主大阿闍梨耶可^レ護持如意宝珠縁起」を意識しており、『御遺告』と三宝院流における宝珠観が影響していることが指摘できる。中世日本において如意宝珠信仰を支える基幹テキストとして存在した『御遺告』には、

夫以如意宝珠是從^二無始^一以來非^レ有^二竜肝鳳凰等^一。自然道理如来分身者也。或偏鳳肝竜腦云云是大虚言也。所以者何。自然道理如来分身、惟真実如意宝珠也。号^二自然道理如来分身^一者、是任^二祖師大阿闍梨口決^一成生玉也。密之上密深之上深者。輒不^レ注^二儀軌^一。是大日如来所説也。曰^二成生玉^一是能作性玉也。^㉕

として、如意宝珠とは竜の肝や鳳凰の脳等ではなく、自然道理の如来の分身であるとする。自然道理の如来とは、同じく二四条に「然而如意宝珠為^二皇帝^一。方伺^二其実体^一自然道理釈迦分身也」とあることから釈迦を指すものの、「自然道理」とされることから応身の釈迦の舍利ではなく、法身（大日）の舍利である。^㉖『秘鈔』においても「遮那」・「法身」とあることから、釈迦の骨である舍利は如意宝珠であり、大日如来にも通じてくる。そして、本次第における大日如来とは、道場観冒頭で登場した一身四面の大日如来を指すと考えられる。

、宝珠變成^レ八幡大菩薩。及成^二高祖遍照金剛^一。二尊雖^レ異内証是同。互映^二真影^一、共施^二濟度^一。先八幡大菩薩者、其御鉢比丘形、右手執^二六輪錫杖^一驚^二衆生長眠耳^一。左手持^二百八念珠^一顯^二煩惱即菩提極理^一。坐^二赤色蓮花^一生死汚泥顯^レ得^二自在之樂^一。頂上戴^二日輪^一如來自自然惠日表^レ破^二無始大夜^一。此是大染金剛化現也。亦是衆生本覺神心也。常於三世不壞化身、利^二衆有情^一無^二時暫息^一。次、高祖遍照金剛者、身肉色著^二香色衣^一。右手持^二五智金杵^一安^二心上^一。左手執^二兩顆念珠^一置^二臍前^一、坐^二瑜伽座上^一、表^レ住^二本初不生理^一、說^二三密瑜伽法^一、顯^二自身即仏理^一。雖^レ現^二仏身於凡身^一、無^レ隔^二内証於遮那^一、利^二益強剛難化衆生^一。令^レ証^二速疾頓証直道^一、不^レ動^二生死^一、直至^二菩提^一。皆是大日如來加持力高祖大師遺恩。大小諸神無量賢聖前後圍繞。^③

「内証是同」とあるように八幡神と空海の異なる両者の同一性を示す内証とは何かが問題となってくる。高見氏は「杲宝法印に従えば、両尊の威儀相好が示す衆生濟度の本誓に依つて、その内証の是同を見ようとしている」と述べる。^④筆者も高見氏の見解に概ね相違はない。ただし、より詳細に論じれば、道場観全体や次第で宝珠三種印明が用いられていることからして、内証は如意宝珠に集約される。内証とは『密教大辞典』によると、「自己の心中に証得せる真理を指す」^⑤とあり、内証は悟りの世界であることから衆生濟度や如意宝珠ではないとも考えられる。だが、我宝の『駄都秘決鈔』には「金剛薩埵之位釈迦生身也。一代以後入^二宝部^一者、顯^二南方内証之體^一也。故舍利内証究竟之法身也。」^⑥とあり、舍利すなわち宝珠を内証^二法身として^一いる。南方の内証とは五智の中の平等性智に当たり、内証^二法身たる宝珠が衆生濟度のために化現した存在こそが空海と八幡神であった。道場観では八幡神の持物等の意味付が行われている。総じていえば常に衆生の無明を破ろうとしているという意味になろう。一方の空海は右手に五鈷杵、左手に念珠を持して座すという姿であるが、空海の姿自体が密教の即身成仏を示している。これまでみてきたように、道場観を通じて大日如來や愛染明王は衆生のいわゆる煩惱を

除くためのプロセスを展開してきた。一連のプロセスは八幡神と空海にも変わることなく通じている。両者の内証は如意宝珠を指し、衆生は根源的には仏であることを悟らせ、菩提に至らしめる点にある。そして内証が同じであることを表象する行為として「互映三眞影」という互いの御影説話が組み込まれるのであった。

本章の最後に『弘法大師法私』と東寺八幡神をめぐる若干の問題提起をしておきたい。本次第の道場観では、これまでみてきたように八幡神の姿は赤色蓮華に坐し、右手には錫杖、左手には百八念珠を持つという僧形八幡であった。本次第は奥書に「右奥批本東寺御影堂秘藏次第也」とあり、東寺御影堂に伝わっているとされる。だが、『東宝記』の記述と複数の相違が生じていることが指摘できる。例えば、『東宝記』の場合では空海が八幡神を一方的に書き写しており、両者が不二であるとは見受けられない。また、東寺影向の八幡神は三神である。同じ僧形八幡であっても三神形式の場合はふくよかで若年相である一方で、単体の八幡神の場合は老相であることが指摘されている。^④ 実際、東寺八幡宮の僧形八幡はふくよかな若年相であり、左手には念珠を持つておらず次第と東寺八幡神の相好が異なる。ゆえに『弘法大師法私』は当初、東寺御影堂の空海を本尊として修法する次第ではなかった可能性が高い。

小 結

本稿では互いの御影説話と『弘法大師法私』を通じて、空海・八幡同体説の展開における空海像を検討してきた。

八幡神と空海が互いの姿を描き合うというのは、両者の内証が同じであること即ち同一性を可視・表象する行為であり、密教の事相の観点より内証を如意宝珠に集約したのが『弘法大師法私』であった。一三五〇年成立の

『弘法大師法私』は、三宝院流と栄海を中心とした勧修寺流を中心として、一二七〇年頃から登場し始める互いの御影説話や本地を愛染とする八幡信仰の流布、修法次第の形成時期という一連の流れの中に位置づけることができる。

『弘法大師法私』の道場観では、如意宝珠が大日如来や愛染明王、そして八幡神と空海に展開されるように如意宝珠が種々の諸尊に変容してゆく。とりわけ八幡神と空海は道場観の中に登場する大日如来や愛染明王とは異なり、両者は現世に登場し相好をもつて衆生即仏を示す。八幡神は有情を利樂し空海は難化の衆生を利益しており、如意宝珠や大日如来、愛染明王より衆生に密接な救済活動を行っている。

伝承によって場面が異なるものの、神護寺や東寺、東大寺などの実在する土地で空海のもとに現れる存在としての八幡神や互いの御影作成の説話を、本稿では『弘法大師法私』成立の歴史的前提として子細に分析した。また、入定留身して現世に身を留め続ける空海という入定信仰の影響も留意しておく必要があるだろう。つまり、現世に出現する八幡神が空海と同体化することによって八幡神＝空海は、舍利・宝珠による積極的・直接的な衆生救済を行う媒体として理解されていたと指摘できるだろう。

キーワード 互いの御影 如意宝珠 弘法大師信仰

註

① 中川善教「弘法大師の本地と前身及びその後身」(一九三四年)では、空海が約三〇もの諸尊格や人物との関連があることが述べられる。

② 嘉元四年(一一三〇六)に下野国(現在の栃木県)で誕生した杲宝は、俗名を弘基といい、源氏の流れを受けているとされる。高野山に入山し幼少の頃より密教を学び、後に東寺に來住して頼宝に随い真言の教相を学び、浄宝より三

宝院流の灌頂を受けた。諸寺の学頭を務め、後に延文三年（一二五八）二月二十八日に法印に叙し、同四年には大僧都となる。（編纂者塙保己一補・太田藤四郎『続群書類従・第九輯上伝部』所収の「杲宝僧都事実」をもとに作成）。

③ 高見寛應翻刻「弘法大師法私」（『仏海』金蔵寺、一九六九年）一五三―一六二頁。

④ 高見寛恭「弘法大師法考（二）」（『密教学』二、一九六六年）。

⑤ 発行者鷲尾隆輝 伝授阿闍梨加藤有雄「東寺観智院相承 勸流杲宝方伝授目録解説 六」（真言宗総本山東寺、一九八九年）

⑥ 注五前掲書、二頁・九一頁。

⑦ 船田淳一「神仏と儀礼の中世」（法蔵館、二〇一一年）三四七頁～四〇三頁。

⑧ なお、空海・八幡同体説の展開をうかがい知る上で興味深いものとして、京都府長岡京市乙訓寺の本尊である秘仏「大師八幡神合体像」が挙げられる。この像をめぐる伝承については、中村幸真氏によって隆光（一六四九～一七二四）による乙訓寺再興運動によって成立したと指摘されており、中世日本に注目する本稿では検討の対象としない。

「護持院隆光による乙訓寺の復興―乙訓寺秘仏『大師八幡神合体像』をめぐる―」（『善通寺教学振興会紀要 二四号』二〇一九年）

⑨ 長谷寶秀『弘法大師伝全集 第二』（ピタカ、一九三五年）一八頁。

⑩ 梅津次郎編『弘法大師伝絵巻』（角川書店、一九八三年）八八～八九頁。

⑪ 長谷寶秀編『弘法大師伝全集 第三』（ピタカ、一九三五年）七四頁。

⑫ 国書刊行会『続々群書類従 第一二宗教部』（続群書類従完成会、一九七〇年）五四頁。

⑬ 紺野敏文『日本彫刻史の視座』（中央公論美術出版、二〇〇四年）三三三頁。高橋早紀子「東寺八幡三神像の製作背景に関する考察」（『美術史 一七七』、二〇一四年）

⑭ 福山敏夫「寺院建築の研究 下」（中央公論美術出版、一九六三年）七三頁。

⑮ 正和四年（一三一五）頃の成立「神護寺略記」である。「八幡大菩薩像一鋪奉安置堂内艮角帳、大師御筆但二重内奉懸之、上ハ新本、右承平實録帳云、八幡大菩薩一鋪」として空海筆であることが記されている。

⑯ 藤田經世『校刊美術史料 寺院篇中巻』（中央公論美術出版、一九七五年）三二〇頁。

⑰ 注一六前掲書、三三八頁。

- ⑮ 佐藤弘夫『霊場の思想』（吉川弘文館、二〇〇三年）一〇八―一二頁。
- ⑯ 上田霊城『改訂真言密教事相概説―四度部―』（同朋舎メディアプラン、二〇〇二年）一二七―一二二頁。
- ⑰ 大正七九・三三四下頁。
- ⑱ 東大寺図書館（一七一函／五六九号／一冊）。
- ⑲ 真福寺大須文庫（二七八―一五―四、写、一帖、マイクロ／デジタル、一〇〇二〇三三二四）。
- ⑳ 真福寺大須文庫（二七八―一五―三、写、一冊、マイクロ／デジタル、一〇〇二〇三三二三）。
- ㉑ 国文学研究資料館編『中世日本紀集 真福寺善本叢刊（第一期 第七卷）』（臨川書店、一九九九年）四二五・四二七頁。なお、「八幡大菩薩」には「又、大菩薩・大師、互ニ自手ヲ御鉢ヲウツシトメタマフ。大菩薩ノ御鉢、如此。大師ノ御影ハ、未拝見。口伝ニハ、東寺ノ不動ノコトシト習伝タリ」として、互いの御影説話が所収される。空海の御影が不動明王の様であるとの習いから明王と同じく右手に宝剣、左手に念珠（羅索に該当）を持す秘鍵大師であろう。しかし、秘鍵大師は最古のものが一三世紀前半である点や、テキスト後半部に「又〇〇、又△△」として複数の口伝がある点。加えて複数の書写識語がある事から、後半部は書写の過程で追記されたものであると考えられる。だが、『八幡講秘式』の存在からも八幡神の本地を愛染と説く部分においては文永一〇年の伝授識語が妥当とみられる。
- ㉒ 殊ニハ高祖ノ全身法身ノ駄都也。此レハ是身心愛染之源底也。凡此愛染明王ハ諸仏ノ高祖諸神ノ法鉢也。就レ中八幡大菩薩ハ此明王ノ応化也。今此菩薩ハ無ニ所居唯澄信樂ノ水ニ云云。明王又但住ニ衆生之心想ノ中ニ云云。面上三目はヲ云ニ八幡三所ニト、頂上ノ日輪ハ頭ニス本地之高徳ヲ八幡又勇士之本尊也。本地弓箭ノ秘印表レ之。慈悲深重ノ故号ニ大菩薩ト。是レ身心愛染ノ化用也。依レ之舍利愛染不離之塔婆是ヲ云ニ如法愛染ト、高祖留身ノ入定愛染金剛ノ微細定也。高祖ノ前身是云ニ天照大神宮ト明王ノ応迹是云ニ八幡大菩薩ト。（中略）受ニケ生ヲ于大日ノ本国ニ奈ミ為ニ天照尊ノ余粟ト依ニ高祖之芳訓蒙リ三密ノ聴許ヲ酬ニテ八幡之加持期ニス自心之成仏ヲ皆是法身駄都之化用也。
- ㉓ 注三前掲書、一五七頁。
- ㉔ 東大寺図書館『八幡大菩薩法』（一七一函／五六八号／一冊）
- ㉕ 沼尻憲尚『杲宝の事相授法について』（豊山教学大会紀要第四〇号、二〇一二年）
- ㉖ 貫達人・三浦勝男編纂『鶴岡叢書 第四輯 鶴岡八幡宮寺諸次第』（鶴岡八幡宮社務所、一九九一年）三三頁。
- ㉗ 佐藤愛弓『中世真言僧の言説と歴史認識』（勉誠出版、二〇一五年）一一二頁。

- ③① 平雅行「鎌倉幕府の将軍祈禱に関する一資料」(『大阪大学大学院研究科紀要 第四十七巻』大阪大学大学院研究科、二〇〇七年)。
- ③② 注三前掲書、一五六頁。
- ③③ 上田豊城『真言密教事相概説―諸尊法・灌頂部―〔下〕』(同朋舎出版、一九九〇年)二四五頁。
- ③④ 注三前掲書、一五六―一五七頁。
- ③⑤ 注九前掲載書、二〇頁。
- ③⑥ 苦米地誠一「日本密教における舍利と宝珠」(『高野山大学密教文化研究所紀要 三〇』、二〇一七年)。
- ③⑦ 注三前掲書、一五七頁。
- ③⑧ 注四前掲書。
- ③⑨ 『密教大辞典 縮刷版』(法蔵館、一九三一年)一六九五頁。
- ④① 『駄都秘決鈔 第三』『真言宗全書二三』(真言宗全書刊行会、一九三五年)二一七頁。
- ④② 長岡龍作「神像成立の関わる一考察―古代日本の八幡神―」CBS実行委員会編『論集カミほとけ―宗教文化とその歴史的基盤―ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集 第三号』(二〇〇五年、法蔵館)一四・一六頁。